

SJ

The Safety Japan
since 1971

Safety Report

セーフティポ 若者

高校生のバイク利用を前提とした
交通安全教育について議論

9月16日、前橋テルサ(群馬県前橋市)で「第5回BIKE LOVE FORUM(以下、BLF) in 群馬・前橋」が開催された。BLFは、世界に通用するすばらしいバイク文化の創造をめざすとともにバイク産業の振興、市場の発展等を図ることを目的にバイクに関わる業界・団体※1、地方自治体※2などが核となり、利用者等も交え、関係者間で社会におけるバイクへの認知と受容、共存のあり方やバイクの将来像等に関して議論する会議で、2013年に経済産業省の呼びかけで立ち上げられた。

交通安全条例制定などによって
「3ない運動」を廃止した群馬県

まず群馬県議会議員の須藤昭男さんが「『3ない運動』廃止から群馬県交通安全条例制定に向けた取り組み」というテーマで講演。1982年から始まった高校生に対する「3ない運動(免許を取らない・バイクを買わない・バイクに乗らない)」は、推進した全国高等学校PTA連合会が2012年に「自転車・バイク・歩行者のマナーアップ運動」へと転換し、終結を迎えた。しかし、未だに多くの高校では「3ない運動」が継続されており、この背景には「何かあれば学校が責任をとる」という風潮があるのではないかと考えられる。こうした状況の中、群馬県は2014年に交通安全条例(以下、条例)の制定と交通安全対策に関する決議を行い、「3ない運動」を事実上廃止した。条例制定の背景には、初心運転者の事故発生率※3が1989年から2013年まで群馬県は全国ワースト1位と、全国平均と比べ高い水準だったことがある。「『3ない運動』を押し進めてきたことで高校生への安全教育が置き去りになり、それが初心運転者の事故発生率を高めている一因ではないかと思いました」と須藤さんら県議会議員は交通安全対策特別委員会を設置して、「3ない運動」の見直しの議論から、条例の制定へとつなげた。

この条例の特徴は「在学中に自動車等の免許を取得可能な年齢に達する高校生等が、交通社会の一員として責任ある行動がとれるよう、総合的かつ計画的な交通安全教育の実施に努めること」など交通安全教育の推進を盛り込んでいることだ。須藤さんは条例制定の効果として、初心運転者の事故発生率が低減し全国ワースト1位から脱却したこと、二輪、四輪ともに運転免許取得者が増加したことなどを強調。その一方で、群馬県内の自転車事故発生件数は2014年から2016年にかけて中学生が37%削減したのに対し、高校生は7%しか削減できていないことなど今後への課題を挙げた。

学校、行政、警察、業界が協力し、
高校生がバイクを安全に利用できるように

続いて、経済産業省製造産業局自動車課課長補佐の高橋一幸さんが、2020年をめざして進めている「二輪車産業政策ロードマップ※4」の進捗状況を報告。この後、日本大学理工学部助教授の稲垣具志さんをモデレーターに迎え、パネルディスカッション「高校生等に対する交通安全教育の推進」が始まった。「3ない運動」を廃止した群馬県では今年7月に同県教育委員会の主催で公立高校の生徒を対象とした「二輪車安全運転者講習会」を実施。同県教育委員会健康体育課指導主事の黒巖賢さんは「事故事例に基づいた教育内容を計画し、生徒だけでなく交通安全指導を担当している先生方にもバイク(原付)に乗って参加していただきました。急制動など公道ではできない体験ができたことは意義があったと思います」と話した。群馬県警察本部もこの講習会に協力しており、同県警察本部交通部交通企画課交通安全対策室長の岡本英仁



「『3ない運動』廃止から群馬県交通安全条例制定に向けた取り組み」というテーマで講演した群馬県議会議員の須藤昭男さん



パネルディスカッション「高校生等に対する交通安全教育の推進」のモデレーターを務めた日本大学理工学部助教授の稲垣具志さん

Contents

- P1 Safety Report セーフティポ 若者
- P2 Safety Info インフォメーション
- P3 Safety Report セーフティポ 子ども
- P4 Close Up クローズアップ 福祉安全運転
- P5 Close Up クローズアップ 交通教育センター
Close Up クローズアップ 四輪販売会社
- P6 SJ Interview 石田敏郎・早稲田大学名誉教授
- P7 All About SAFETY 安全をいかに創造するか
- P8 危険予測トレーニング(KYT)
SJクイズ



Safety for Everyone

Honda はすべての人の
交通安全を願い活動しています。

SJ ホームページは

編集室：本田技研工業株式会社 安全運転普及本部内
〒107-8556 東京都港区南青山2-1-1
TEL：03(5412)1736
<http://www.honda.co.jp/safetyinfo/>

編集人：原田洋一

※ご不明な点がございましたら、下記までお問合わせください。
㈱アストクリエイティブ安全運転普及本部係
TEL：03(5439)1191
E-mail：sj-mail@spirit.honda.co.jp

さんは「実技指導は生徒の安全意識が高まるので効果的」と語った。埼玉県では現在、「3 ない運動」見直しの検討が進められており、同県教育委員会生徒指導課生徒指導主事の澤畑信行さんは「学校に無許可で運転免許を取得した生徒による事故が課題」と述べた。日本二輪車普及安全協会安全普及部長の作田裕樹さんは二輪車業界が高校生を対象に実施している交通安全教育の体制や内容、横須賀二輪車安全普及協会副会長の藤井正一さんは「3 ない運動」の全盛期に「乗せて教える」へ方針転換した神奈川県横須賀市の地域、行政、利用者、二輪販売店が一体となった取組みを紹介した。

モデレーターの稲垣さんは、「『3 ない運動』を廃止したら終わりではなく、その後も高校生のバイクの利用状況をきちんと見続けて、安全で快適に利用できる環境を整備して欲しいと思います。そのためにも学校、行政、警察、業界がそれぞれの立場で、高校生にどのような交通安全教育ができるのかを議論する仕組みづくりが必要です」とパネルディスカッションを締めくくった。

このほか、今回のBLFでは(株)リサーチ・アンド・ディベロップメントのビジネスプロデューサーである堀好伸さんによる「日常の“体感”がファンを生む」という講演も行われた。多くの若者との対話を通じ、若者の消費行動を分析している堀さんが「若者に二輪文化の再燃の兆しがあり、皆さんの活動は一步一步前進しています」と業界関係者にエールを送った。

最後に、日本自動車工業会 二輪車特別委員会委員長の柳弘之さんが「二輪車メーカーは安全・安心で、おもしろいバイクをつくるために最大限の努力をしていくつもりです。これからも地域の皆さんと協力しながら、良い二輪車市場をつくっていききたい」と述べ、BLFは幕を閉じた。

※1 経済産業省、日本自動車工業会、日本自動車部品工業会、全国オートバイ協同組合連合会、日本二輪車普及安全協会、日本自動車輸入組合、全国二輪車用品連合会、日本二輪車オークション協会、中古二輪自動車流通協会
 ※2 三重県、鈴鹿市、静岡県、浜松市、磐田市、熊本県、群馬県、前橋市
 ※3 事故発生率(%)=普通自動車免許取得後1年以内に起こした事故数/普通自動車免許取得者数×100
 ※4 二輪車産業政策ロードマップ=2014年に二輪車関連団体および地方自治体によって策定された二輪車産業の成長戦略。2020年をゴールとした目標設定、課題整理、実行施策および展開イメージがまとめられている。



パネルディスカッションでは二輪車業界が取り組んでいる高校生に対する交通安全教育の事例なども紹介された

Safety Info.

インフォメーション

警視庁とHondaが交通事故防止対策の推進に関する協定を締結

9月27日、警視庁にて交通事故防止対策の推進に関する協定の締結式が行われ、同庁の山本仁交通部長と、Honda 安全運転普及本部の原田洋一事務局長が協定書に調印した。今後、「SAFETY MAP※」に表示されている急ブレーキ多発地点情報を警視庁に提供するなど、道路利用者の安全確保に向けて相互に協力していく。山本交通部長は「この取組みを道路環境の整備や交通

安全教育の対策につなげ、東京都民の安全確保に努めていきたい」と挨拶。原田事務局長は「私どもが提供する東京都内の急ブレーキ情報をハードとソフトの両面の対策立案に活用いただき、1件でも悲惨な交通事故が減れば、これに勝るものはありません」と語った。Honda が、このような協定を各警察本部と締結するのは警視庁が全国で4例目となる。



警視庁 山本仁交通部長(左)と Honda 安全運転普及本部 原田洋一事務局長(右)

※SAFETY MAP=Honda が開発したソーシャルマップ。日本中を走る Honda インターナビ(双方向通信型のカーナビ)搭載車から通信で送られてくるデータをもとにした急ブレーキ多発地点情報をはじめ、事故多発エリア情報やゾーン 30 情報などが表示されている。パソコンやスマートフォンで自由に閲覧でき、自分が危険だと感じた場所を投稿することもできる。詳細は以下のホームページを参照。https://safetymap.jp/

第 48 回全国白バイ安全運転競技大会開催

全国から集まった白バイ隊員が白熱した競技を展開



傾斜走行操縦(スラローム)競技。Honda は大会の審判業務などに協力した

10月7日、8日の両日、自動車安全運転センター安全運転中央研修所(茨城県ひたちなか市)にて第48回全国白バイ安全運転競技大会(主催:警察庁)が開催された。

この大会は、全国の白バイ隊員の安全運転技能の向上、士気の高揚及び隊員相互の融和団結を図ることを目的として、1969年より実施されている。今年は、46都道府県警察および皇宮警察から、女性隊員40名を含む188名の選手が参加。バランス走行操縦競技、トライアル走行操縦競技、不整地走行操縦競技、傾斜走行操縦(スラローム)競技の計4種目によって熱戦が繰り広げられた。

主な結果は以下の通り。

- 団体の部
 - (第1部・9都府県警察)
 - 優勝/警視庁
 - 第2位/神奈川県
 - 第3位/愛知県
 - (第2部・37都府県警察・皇宮警察)
 - 優勝/佐賀県
 - 第2位/宮崎県
 - 第3位/群馬県

- 個人競技の部
 - (男性の部)
 - 優勝/北村匠(神奈川県)
 - (女性の部)
 - 優勝/中前まどか(警視庁)



不整地走行操縦競技



閉会式では各部の入賞者が表彰された

Safety Report

セーフティルポ 子ども

子どもに自分で考えて行動する力を身につけてもらうために

(一財)福岡県交通安全協会では平成15年に交通安全教育班を設置し、幼児・小中学生と高齢者を対象にした交通安全教室を県内各地で開催している。現在、交通安全教育班は白石清美さん、伊勢崎美佳さん、立石千栄さん、藤渡直美さんの4名で、平成28年度は交通安全教室を314回実施した。

9月26日は、福岡県久留米市の保育園「童心園」で交通安全教室が行われた。最初に藤渡さんが Honda の交通安全キャラクター「できるニャン」と一緒に、家や公園などから道路に出る時は必ず止まること、クルマが来ていないか右、左、右を観なければいけないことを園児に伝える。続いて、「まんまるちゃん」という手づくりの教材を使って、信号機の話へとつなげる。白石さんが実際の信号機のレンズを園児に見せながら、「お母さん、お父さんが赤信号で道路を渡ろうとしたら、『ダメだよ』って教えてあげましょう。クルマがスピードを出していれば、あっという間にやって来るし、運転手さんも赤信号で渡るとは思っていません。また、青信号になっても、すぐに渡らないように。青信号でもクルマが来ることがあります。運転手さんはみんなのことに気づいていないかもしれないので、自分でよく観て、よく考えてから渡りましょう」と園児に説明する。

次は、横断歩道の渡り方を福岡県交通安全協会オリジナルの教材「としこちゃん」を使って伝える。これは女の子の大きな顔と手、足のイラストで構成されている。足を揃えてきちんと止まること、手はまっすぐ上に高く上げること、目だけでなく顔もしっかり動かすことをわかりやすく示すためのものだ。その後、園児一人ひとりに横断歩道の渡り方を実践してもらう。最後に「飛び出しはしません」「信号を守ります」「横断歩道を渡ります」「知らない人にはついていきません」という4つを園児と約束し、交通安全教室は終了した。

交通安全教育班の皆さんは子どもが小さいうちから自分自身で考えて行動する力を身につけてほしいと願いながら、指導に取り組んでいる。「赤信号でも渡っている大人や友だちがいれば、それにつられて渡ってしまうことがあると思います。しかし、これは危険な行動です。交差点ルールを守ることはもちろん、自分の目で観て考えた上で安全な行動ができるようになってほしいと思っています。横断歩道の渡り方を練習する時も、小学校進学を控える年長の子どもには私たちがアドバイスをしないで、自発的に安全確認をやってもらうようにしています」と白石さんはいう。



横断歩道の渡り方の手順をわかりやすく伝えるためのオリジナル教材「としこちゃん」



模擬の信号機と横断歩道を使って渡り方を練習



丸型の紙が動物に変化していく「まんまるちゃん」という手づくり教材を使って園児の関心を高める



Hondaの交通安全キャラクター「できるニャン」のパペットを活用した導入部



実際の信号機のレンズを園児に見せながら信号の色の意味を説明

指導者の皆さんの活動を動画でご紹介
<http://www.honda.co.jp/safetyinfo/area/movie/>



写真左から立石千栄さん、白石清美さん、伊勢崎美佳さん、藤渡直美さん



小学校低学年向けの交通安全教室では、イラストを見せて「この後、どんなことが起きるか」子どもたちに考えてもらう課題も取り入れている

神奈川県相模原市で「つながる、見える交通安全」開催

8月19日、ユニコムプラザさがみはら（神奈川県相模原市）で子どもの交通事故防止啓発イベント「つながる、見える交通安全」が開催された。これは北里大学医療衛生学部准教授の川守田拓志さんが主催したイベント。「未就学児から小学生低学年において、交通安全を学ぶ機会をつくるのが重要です。特に、保護者や地域、様々な企業・団体がつながり、連携して子どもの交通事故を減らす取り組みができる場をつくりたいと考えました」と、川守田さんは同大学がある相模原市内の企業・団体を中心に参加を呼びかけた。これに相模原南警察署や相模原市南区をはじめ、市内外の約20の企業・団体が応じ実現した。

8月にイベントを開催した意義を川守田さんは「子どもの交通事故のリスクは9月から12月にかけて上昇します。また、小学生が夏休みの宿題の題材として考えることで、保護者とお子さんが楽しく交通安全を学ぶ好機になります」と説明する。この日は家族連れなど約800人が来場。会場では、相模原市南区と相模原中央自動車学校によるHonda 自転車シミュレーターの体験コーナーなどが設けられたほか、親子を対象にした相模原南警察署による交通安全教室なども実施された。



相模原市南区と相模原中央自動車学校による自転車シミュレーター体験



北里大学医療衛生学部& Vision CLUBによる歩行者シミュレーター体験



相模原南警察署による交通安全教室



黒澤インストラクターは交通教育センターレイボー熊本での実施事例をふまえ、自操プログラムを運用する上で注意すべき点を教習指導員と作業療法士に説明



作業療法士が患者役として運転し、助手席の教習指導員が自操プログラムを進行



実技講習では様々な運転補助装置が付いている教習車両を使用



(一社) 沖縄県指定自動車学校協会専務理事の下地一彦さん



(一社) 沖縄県作業療法士会会長の比嘉靖さん



沖縄リハビリテーションセンター病院リハビリテーション科医師の栗林環さん

教習指導員と作業療法士が Honda のプログラムを体験

今回の講習会は、自動車教習所だけでなく、運転復帰へのリハビリを担当する作業療法士とも一体となって取り組みを進めていくことが重要であり、(一社) 沖縄県作業療法士会との合同開催となった。

当日は、県内4つの自動車学校(津嘉山、北丘、普天間、名護)から9人の教習指導員が参加したほか、県内18病院から作業療法士36人も参加しプログラムを体験。障がいのある方の運転復帰に向け、自動車教習所と医療関係者が連携して講習会を行う、全国初の取り組みとなった。

参加者に体験してもらうのは、Hondaが開発した「自操安全運転プログラム(以下、自操プログラム)」である。これはHondaの交通教育センターで、運転復帰を希望する方の能力評価の参考とするために実施しているプログラムで、実車運転時における現状の把握、そこから見えた課題に対する訓練を行うもの

だ。沖縄県では既に津嘉山自動車学校が導入している。同校指導課長の仲原英久さんは「自操プログラムを使って、運転復帰への支援を本格的に始めたところ、問合せや相談は確実に増えています。さらに、3つの病院・施設との連携体制も構築できました」という。会場では、リハビリと教習指導を組み合わせたカリキュラムづくりのポイントについて講義を受けた後、教習車両を使いながら、実車での評価について学んだ。教習車両には、手でアクセル、ブレーキを操作する補助装置や、左手・左足だけでハンドル、アクセル、ブレーキを操作する補助装置が付けられている。参加した作業療法士が患者役となり、これらの車両を運転。教習指導員が同乗し、自操プログラムを進めていく。講師を務めた交通教育センターレイボー熊本の黒澤明良インストラクターが、進路変更やパイロンスラロームなど患者が取り組むプログラムのねらい、運転中に観察すべきポイントなどを説明した。受講者である普天間自動車学校次長の島尻繁さんは「Hondaのプログラムは、実際の運転

Close Up

クローズアップ 福祉安全運転

沖縄県内での運転復帰支援の輪を拡げるため Honda運転復帰プログラムを活用

9月30日、(一社) 沖縄県指定自動車学校協会(県内21校で構成・以下、協会)が沖縄県警察運転免許センターで「沖縄県障がい者運転復帰に向けた教習所指導員講習会(以下、講習会)」を開催した。協会専務理事の下地一彦さんは開催の背景について「脳梗塞などで高次脳機能障がいになった方が回復後にクルマの運転を再開したいというニーズが増えています。しかし、県内で運転復帰に向けた取組みに積極的な自動車教習所はまだまだ少ないのが現状です。そこで、実車による運転可否の判断を支援するためのノウハウを多くの自動車教習所に伝え、こうしたニーズに対応できるようにしたいと考えました」と語った。

場面をふまえた奥深い内容だと感じました。今後、当校でも取り入れたいと思います」と自操プログラムを評価する。

作業療法士や医師と自動車教習所との連携へ

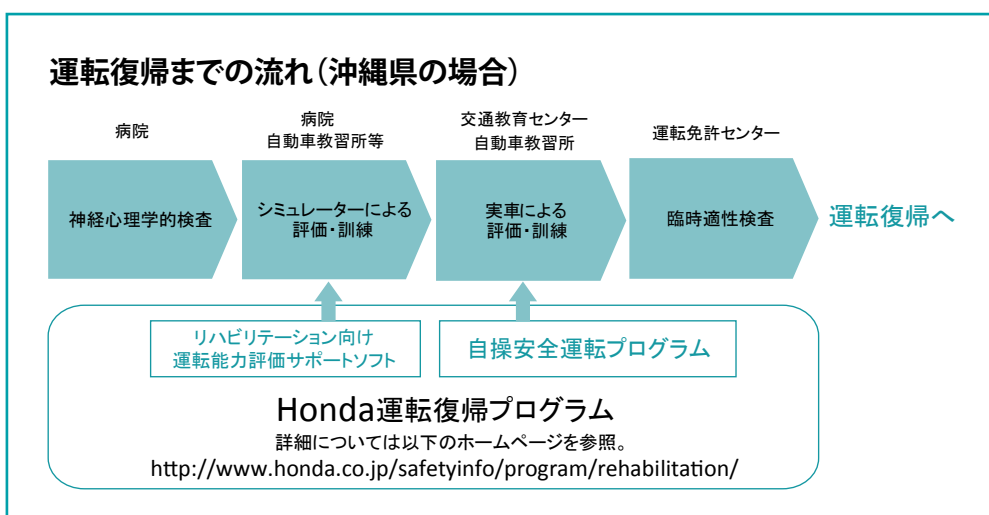
とよみ生協病院 作業療法士の比嘉美和さんは「補助装置の付いたクルマを運転したのは初めてで、慣れないと操作が難しいことを実感しました。今後、補助装置の利用を患者様やご家族に勧める際の役に立ちます」と感想を語った。ちゅうざん病院療養士部長の石川丈さんは「患者様の運転復帰に向けては、教習指導員の皆さんと協働で、しっかり考えながら進めていきたいと思いました」という。

医師の立場で参加した沖縄リハビリテーションセンター病院リハビリテーション科の栗林環さんは「運転可否は、病院内だけの評価では判断しにくい部分があります。実車を運転する動作の中で評価できるようになると判断材料も増え、運転能力をより適正に見極める

ことができます。今日は、自動車教習所の具体的な取り組みを知ったので、今後、運転が再開できる可能性のある方については積極的に支援していきたい」と話した。

(一社) 沖縄県作業療法士会会長の比嘉靖さんは「患者様の運転復帰については自動車教習所の協力が必要不可欠です。この講習会を皮切りに自動車教習所とコミュニケーションをとりながら、お互いに異なる立場からの気づきを共有していきたいと思います。それが、私たち作業療法士の仕事の質を高めることにもつながるはずですよ」と今後を見据える。

主催者である協会の専務理事・下地さんは、「この講習会を機に病気や怪我等で運転を中断している患者様が運転免許課、自動車教習所、作業療法士等と連携した対応により、一人でも多く運転復帰できることを祈念します」と語った。今後は、警察関係者との連携も視野に入れて、県全体としてより一層の連携が望まれる。



パイロンスラロームなどで複数の課題(指定された速度を維持しているか、適切なハンドル操作ができていないか等)を同時に遂行できる能力を評価

Close Up

クローズアップ 交通教育センター

指導者として必要な安全運転技術と
マインドを身につける

(株)ドミノ・ピザ ジャパン(本社:東京都千代田区)は、日本国内で宅配ピザチェーンを展開する企業だ。三輪スクーターなどを利用して配達業務を担当するデリバリークルー(以下、クルー)への安全運転教育は各店舗の責任者であるストアマネージャーが担当している。そのため、同社ではストアマネージャーとなる新入社員を対象に安全運転研修を交通教育センターレインボー埼玉(以下、レインボー埼玉)で実施している。新入社員は毎月入社してくるため、この安全運転研修もほぼ毎月1回行っている。クルーによる交通事故低減に取り組む同社セーフティレーナーの

吉原吾郎さんは「近年は、原付などバイクの運転経験がない若者がアルバイトのクルーとなるケースが増えています。そうした若者に適切な教育をするためには、指導する側が正しい知識と運転技術を持っていることが求められます。新入社員のほとんどはアルバイトとして配達業務の経験を持っていますから、この研修では交通法規や安全運転の基本を再確認してもらうとともに、指導者としての心構えを身につけてほしいと考えています」と話す。

9月12日に開催された安全運転研修は新入社員7人が参加。実技では反応制動やバランス



実技を始める前に、三輪スクーターの点検方法や正しい乗車姿勢を再確認してもらう



前方にある信号機の点灯を確認したらブレーキをかけて停止する反応制動

訓練、法規走行などの課題に取り組んだ(写真参照)。今回はクルーへの効果的なアドバイス方法を学ぶことを目的とした模擬指導も行われた。交互に指導者役と受講者役となり、法規走行と同じコースを走る。指導者役は受講者役の後方を追従走行し、改善に向けたアドバイスをするのである。最後に、インストラクターが「『ルールだから、その通りにやりなさい』という一方的な指導では相手の心に伝わりません。ルール通りにできていなかった場合は、なぜできないのか考えさせて、その理由を聞いてください。相手の事情を把握することで、より具体的な指導ができます」

と補足した。

受講者の山中翼さんは「反応制動では、危険を認知してから停止するまでにかかる距離を実際に確認でき、勉強になりました。急ブレーキを使わないように、『何か飛び出してくるかもしれない』と危険予測しながら運転することの必要性をクルーに伝えていきたいと思っています」と研修の感想を語った。また、俵屋翔さんは「クルーがミスしても、ただ注意するのではなく、なぜそうしてしまったのか相手の考えを聞いてから対応できるようにしたいと思います」と語り、受講者一人ひとりに指導者としての自覚が芽生えているようだった。



バランス訓練の様子。パイロンにはポールを立てられ、車体を傾けた時に屋根が接触しないようにすることも意識してもらう



受講者が2人1組で互いに法規走行のコースを追従走行し、各々の運転を評価し合う



Close Up

クローズアップ 四輪販売会社

幼児に交通安全への関心を高めてもらう
Honda Cars 山陰中央の活動

鳥取県内に8拠点を展開するHonda Cars 山陰中央(本社:鳥取県米子市)は5年ほど前から「あやとりい ひよこ編※」(以下、あやとりい)を取り入れ、同社のスタッフが近隣の幼稚園などに出向いて幼児向けの交通安全教室を実施している。

こうした活動の意義を同社法人販売課課長の入澤一志さんは次のように説明する。「『あやとりい』を使った活動によって、子どもたちの交通安全への関心が高まることを期待しています。そして、これが家族で交通安全について話さきっかけとなって、家族での教育の推進に役立つことを期待していますし、親である大人の安全意識も高めていければいいと考えています」。

9月15日は同社スタッフの森本愛季さんと岩野麻美さんがにしき幼稚園(米子市)を訪問。「あやとりい」を使って、園児に問いかけながら、道路で歩くべき場所や、歩行者用信号機が青、青点滅、赤の時にとるべき行動などを伝えた。今回は鳥取県を本拠地とするJリーグ加盟のサッカークラブ「ガイナレ鳥取」と連携し、同チームのマスコットキャラクター「ガイナマン」も参加した。森本さんと岩野さんは路側帯のある道路のイラストを見せ、「どこを歩けばいいでしょう?」とガイナマンに女の子のイラストを手渡すと、路側帯の外側(車道)に貼ってしまう。すると、園児たちから「違う!」という声が上がった。そして、ガイナマンが指名した園児がイラストを路側



わざと間違った答えを示す「ガイナマン」に園児が正しい道路の歩き方を教えてあげる



帯の内側に貼り、正しい場所をガイナマンに教える。森本さんは「今回は私たちの質問にガイナマンがわざと間違え、それを園児に正してもらうという形式で進めることにしました。ガイナマンの存在を活かして、交通安全教室を盛り上げられたのでよかったと思います」と話す。今回初めて指導者役を務めたという岩野さんは「道路には子どもの知らない危険がたくさんあります。幼児期から安全に対する意識を高めておくことはとても重要だと感じました。今日はその手伝いのできたので、うれしく思います」と語った。

にしき幼稚園園長の塚田京子さんは「Hondaのお店の協力があって、このような交通安全教室を開催することができました。スタッフ

の方の説明もわかりやすく、イラストを見ながら考えるように工夫されていたので、子どもたちにとって有意義な時間になったと思います」と語った。

今後、Honda Cars 山陰中央では活動範囲を本社のある鳥取県の西部地区だけでなく、東部地区にも広げていく考えだ。

※あやとりい ひよこ編=4~5歳児に幼稚園や保育園等の集団教育の中で「音(交通環境音)の理解」「必ず止まること」「必ず観ること」「信号機の理解」という交通安全の基本を繰り返し学ぶことができる交通安全教育プログラム。「あやとりい」は「あんぜんを やさしくときあかしりかいて いただく」の略。
詳細は以下のホームページを参照。
<http://www.honda.co.jp/safetyinfo/kyt/ayatorii/ayatorii1.html>



交通安全教室の導入では音当てクイズを実施。街で耳にする音を再生し、それが何かを園児に答えてもらう



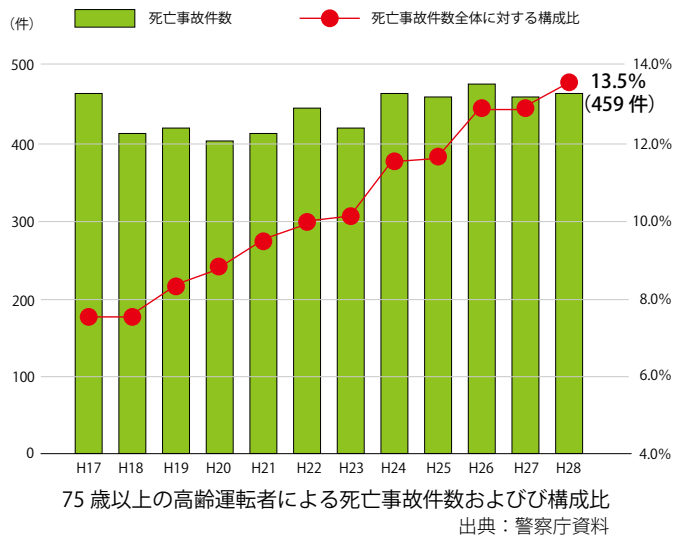
見通しの悪い場所から道路を横断する時は渡る前に一度止まって右、左、右を観ることを強調



Honda Cars 山陰中央 本社総務の森本愛季さん(左)、本社経理の岩野麻美さん(右)と「ガイナマン」(中央)

SJ Interview

SJ インタビュー



早稲田大学名誉教授 石田敏郎さん

高齢者の特性をふまえ、運転リスクへの対応や運転免許制度のあり方について幅広く検討

今年6月、警察庁が「高齢運転者交通事故防止対策に関する有識者会議」の提言をとりまとめた。同会議は昨年11月の「高齢運転者交通事故防止対策に関する閣僚会議」における総理指示をふまえ、警察庁が設置。高齢者の医療や福祉、自動車工学、交通心理学、行政法などの専門家や団体の代表者ら17人の有識者が1月から5回にわたり今後の方策について議論を重ねた。有識者委員の一人として参加し、同会議の座長を務めたのが早稲田大学名誉教授の石田さんだ。石田さんの専門は安全人間工学で、人間工学的な事故分析の方法や認知心理学的なヒューマンエラー対策について研究を行ってきた。交通死亡事故件数全体が減少傾向にある中、75歳以上の運転者による死亡事故件数は横ばい傾向で、その構成比率は上昇している。こうした死亡事故の特徴を分析した上で、「改正道路交通法の確実な施行」「認知症を始めとする運転リスクとそれへの対応」「先進安全技術等」「運転免許証の自主返納等」というテーマで今後の方策をまとめた石田さんは説明する。

改正道路交通法の確実な施行に向けての課題は、認知症に係る医師の診断を受ける対象者の増加である。「診断を行う協力医師の確保に向けた取組みと、認知症の診断に係る訴訟リスクを含め、医師が抱える様々な不安を払拭していくことが

必要です」と石田さんはいふ。他方、高齢者講習の受講待ち期間（予約から受講するまで）の長期化も課題として挙げられ、都道府県公安委員会の直接実施による期間短縮の推進を提言している。

個々の能力に応じて補償運転を促すことが必要

有識者会議では、認知症を始めとする高齢者の運転リスクを、認知症、視野障がい、その他加齢に伴う身体機能の低下という3つの論点に整理し、それぞれへの対応を検討。認知症については認知機能と安全運転の関係に関する調査研究の実施、認知症のおそれがある者への早期診断・早期対応、視野障がいについては視野と安全運転の関係に関する調査研究の実施、視野障がいに伴う運転リスクに関する広報啓発活動の推進が必要だと結論づけた。「視野障がいは、自分では気づきにくいので、少しでも異変を感じたら眼科医の診察を受けてほしい」と石田さんは訴える。その他加齢に伴う身体機能の低下では、加齢に応じた望ましい運転のあり方等に係る交通安全教育等の推進、高齢者の特性等に応じたきめ細かな対策の強化に向けた運転免許制度のあり方等に関する調査研究の実施を必要な方策とした。

「高齢運転者には補償運転を促すことが

重要だと思います。自分から危険な状況をつくり出さないように、運転する時間帯や場所などを選択し、加齢による運転能力の低下を補うようにするのです。高齢者講習は70歳以上が対象だが、石田さんは70歳からでは遅いと考えている。「60代のうちから段階的に受講できるような仕組みが理想的です。より早く自分の運転能力がどのように変化しているかを知っておくことで、10年後、20年後がイメージしやすくなり、将来に備えることができます。認知症や眼の病気の早期発見にもつながるでしょう」。

安全運転サポート機能について高齢者に正しく理解してもらうための啓発を

石田さんが最も期待を寄せているのが、先進安全技術の活用だ。政府は自動ブレーキおよびペダル踏み間違い時加速抑制装置を搭載した自動車を「安全運転サポート車（愛称：セーフティ・サポートカーS）」と定義し、官民挙げて普及啓発していく方針を示している。安全運転サポート車の普及によって、正面衝突等・人対車両・追突等、ブレーキとアクセルの踏み間違いを原因とする死亡事故の抑止効果が見込まれるのだ。ただし、課題もあると石田さんは指摘する。「こうした運転支援システムは、条件によっては適切に作動しない場合があります。です

から、機能の限界や使用上の注意点を高齢者に正しく理解していただかないといけません。機能を過信せずに、自分が責任を持って安全運転しないとけないことを教育する機会が必要です。例えば、安全運転サポート車を購入した高齢者は最寄りの自動車教習所などで運転支援システムの正しい使い方を体験しながら学べるようになると思います」。このような安全運転サポート車に限って運転できる限定条件付免許の導入など免許制度の見直しについても、有識者会議では提言している。

運転免許証の自主返納は、最終的な手段だと石田さんは位置づけている。「安全運転教育や先進安全技術で支援しても、客観的に運転リスクが高まっていると認められた方は運転免許証を返納していただくしかありません。しかし、東京などの都市部以外では返納した後の移動手段の確保が課題で、誰も答えを持っていないのが現実です。高齢者の外出は時間帯や場所が限定されますから、今後は乗合タクシーやタクシー定期券などを活用しやすくするための環境整備が必要ではないでしょうか。高齢者の問題はみんなの問題でもあるので、社会全体で高齢者の生活を支えていくという視点を忘れてはなりません」。

2017トラフィックセーフティ・フォーラム in 埼玉

主催：交通教育センターレインボー埼玉、交通教育センターレインボー和光

内容：事例発表／(株)C&Fロジホールディングス 熊坂義明氏

帝石パイプライン(株) 後藤貴浩氏

講演/事故を減らすための安全運転教育、2つの知識と3つの定石

東京海上日動リスクコンサルティング(株) 北村憲康氏

<お問い合わせ先>

交通教育センターレインボー埼玉 フォーラム事務局 ※月曜日定休 TEL：049-297-4111

11/24 開催

参加費●無料

テーマ「安全運転へのアプローチ」

日時：2017年11月24日(金) 午後1時00分～午後4時30分(予定)

会場：埼玉会館小ホール(埼玉県さいたま市浦和区高砂3-1-4・JR浦和駅西口より徒歩6分)

定員：400名(予約制)

申込：下記ホームページより参加申込書を印刷の上、FAXにてお申込みください。

<http://www.tec-r.com/>

交通教育センターレインボー埼玉

検索

締切：2017年11月10日(金)(定員に達し次第、締切)

All About SAFETY

安全をいかに創造するか

「安全である」ということは、すべての業界において共通の課題といえるでしょう。特に、旅客や貨物などの輸送サービスを担う業界はより高い安全性を確保することが求められています。「All About SAFETY」は、そうした業界や企業がどのように安全を追求しているか、その考え方や具体的な取組みを紹介し、皆様の安全活動の参考としていただくための連載記事です。

東神観光バス(株)の取組み お客様が安心して出かけられる 安全な観光バスをめざす

中央分離帯を飛び越えた乗用車が 観光バスに衝突

6月10日、東名高速道路上り線の新城パーキングエリア付近で観光バスと乗用車の衝突事故が発生した。下り線を走る乗用車が中央分離帯を飛び越え、空中を回転しながら上り線を走る観光バスのフロント部分に衝突。乗用車は観光バスの右上部に乗り上げた。乗用車が衝突するまでの過程は観光バスに装着されているドライブレコーダーに記録されていたので、その映像をテレビのニュースなどで目にした人も多いだろう。

この観光バスを運行させていたのが、東神観光バス(株)(本社：愛知県豊橋市)である。同社は愛知県および静岡県に3カ所の営業所を展開し、60台のバス(大型貸切観光バス、中型貸切観光バス、マイクロバス)を保有している。同社で運行管理者・整備管理者を務める車両課長の久保弘美さんは「お客様にはご迷惑をおかけしましたが、皆さんの命を守れたことは不幸中の幸いです。大ケガを負った当社の運転士も順調に回復し、業務への復帰をめざしています」と話す。

死者ゼロだったのは 運が良かったからではない

不測の事態ともいえる東名高速道路での事故だが、被害を最小限にとどめられた背景には、同社が乗客の安全を確保するための取組みに力を入れてきたことがうかがえる。その1つが新型車両の導入だ。「新型車両には前方の車両への衝突被害を軽減するブレーキシステムや、車線を逸脱するとドライバーに警告するシステムなど先進安全技術が最初から備わっています。さらに、車体の強度も向上しています。今回の事故も旧型のバスだったら、乗用車が衝突した運転席付近はつぶれていたといわれています」と久保さんは説明する。

さらに同社では、ドライブレコーダーと連動したデジタル式運行記録計の装着も進めている。長距離を走る大型貸切観光バスは、この装置が本社と回線で結ばれており、ドライブレコーダーの映像を通じ、バスの運行状況をリアルタイムで確認できる。そして、走行中に異常が発生した場合は本社にあるモニターにアラームで知らせるようになっている。今回の事故も現場を見る前にバスに何が起きたかを把握でき、素早い事故対応につながったと久保さんは振り返る。ドライブ

レコーダーに記録された映像データは本社側で保存できるので、報道機関にもすぐ提供できたというわけだ。

こうしたハード面での取組みを推進する以前から励行してきたのが、運転士や乗務員による乗客に対するシートベルト着用の声かけだ。今回の事故に遭ったバスではガイド乗務員が東名高速道路に入る直前に乗客への着用案内だけでなく確認も実施している。そのため、激しい衝撃にもかかわらず、シートベルトを着用していたことで乗客の車外放出を防げたと久保さんはみている。「最近バス事故の報道もあって、お客様のシートベルト着用への理解が進んでいるようです。すべてのお客様に着用していただくためには、私たちが繰り返し呼びかけていくことが大切だと考えています」。

会社全体の安全に対する意識が さらに高まった

東神観光バス(株)では年4回、運転士を対象にした安全運転ミーティングを実施している。バスに装着されているデジタル式運行記録計にはバスの速度やエンジン回転数はもちろん、ブレーキの強弱や急ハンドルといった操作状況に関するデータが蓄積される。このデータから運転士一人ひとりのクセがわかるので、それをもとに運行管理者が改善に向けたアドバイスをしている。また、運転中のヒヤリハットを共有したり、新型車両に装備されている先進安全技術の使い方や効果への理解を深める場にもなっている。「事故に遭ったバスの運転士はベテランの優良ドライバーです。そういうドライバーでも防げないことがあることを目の当たりにして、これまで以上に運転士一人ひとりが真剣に取り組むようになりました」と、会社全体の事故防止に対する意識がより一層高まったと久保さんは感じている。

業界団体である(公社)日本バス協会は、貸切バス事業者からの申請に基づき安全性や安全の確保に向けた取組み状況について評価認定を行っている。東神観光バス(株)は今年度、この貸切バス事業者安全性評価認定を受けたところだ。

「安全は、お客様の命にかかわってきます。ここをおろそかにしていると、当社だけでなく、業界全体が衰退していくと思っています。これからも、お客様が安心して出かけられる安全な観光バスをめざしていきたい」と、久保さんは力強く語った。



東神観光バス(株)では安全性の高い新型車両への代替を順次進めている



中央分離帯を飛び越えた乗用車が観光バスに向かってくる様子はドライブレコーダーに記録されている



走行中は運転席の様子も撮影されている



東神観光バス(株)車両課長の久保弘美さん

6月10日に発生した事故の経緯

午前5時27分	点呼・車両点検後、出庫。
午前6時21分	乗降地(愛知県八幡町)に到着。現地に待機。
午前7時01分	乗客を乗せ、出発。
午前7時21分頃	豊川インターチェンジから東名高速道路に入る。この際に法規に従い、ガイドがシートベルト着用案内と点検を実施。
午前7時29分	新城パーキングエリア付近に差しかけたところで、対向車線より乗用車が中央分離帯を越えて突入し、バスと衝突。同時に同社運行管理部のパソコンにアラームを送信。
午前8時00分	同社管理職および契約事故調査会社が現地到着し対応。乗客・乗務員47人は病院に搬送。

KYT

危険予測トレーニング 第59回 夜間の横断歩道（四輪車編）

あなたは夜間の住宅街を走っています。対向車が接近してきました。あなたと対向車との間には横断歩道があります。安全に走行するには、どのようなことを予測する必要がありますか？



交通事故を防止するためには、路上で出会うさまざまな危険を予測することが大切です。このコーナーでは危険感受性を高めるための題材を提供します。今回は四輪車のドライバーに、夜間の横断歩道での危険について考えてもらうためのKYTです。

活用方法

1. 少人数のグループをつくります。
2. 「交通場面のイラスト」を見せながら、意見を出し合います。
3. その後、「解答・解説※」を参考にして、どんなことに気をつけて運転すれば良いか再び話し合ってください。

※「解答・解説」と「交通場面のイラスト（カラー・A4版）」は下記 SJ ホームページでご覧いただけます。また PDF ファイルもダウンロード（無料）できます。

ホンダ SJ 検索

【使用上の注意】

- 営利目的での利用はおやめください。
- 内容の無断転載、無断改変、一部抜粋しての利用はおやめください。
- その他、使用に関するご質問はお問い合わせください。
本田技研工業（株）安全運転普及本部
TEL：03（5412）1736 E-mail:sj-mail@spirit.honda.co.jp

© 本田技研工業（株）

? SJクイズ 四輪車編

Q1

平成 28 年中の交通死亡事故件数を昼夜別にみた場合、夜間※の割合は次のうちどれでしょう？

- ①約 25% ②約 50% ③約 75%

※夜間＝日没時から日の出時まで

Q2

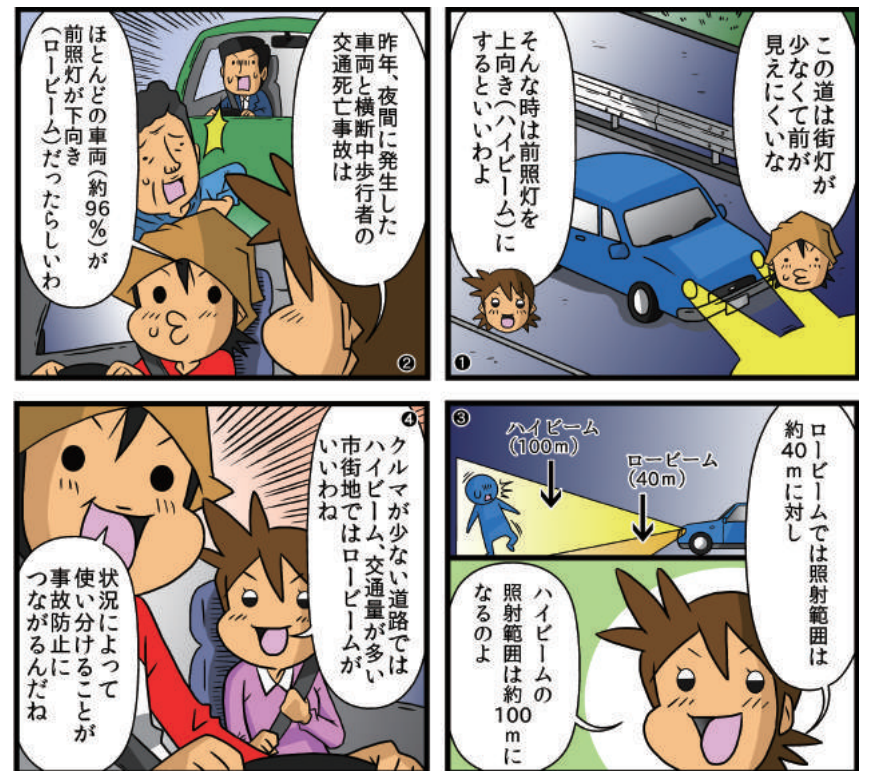
夜間の交通死亡事故件数を事故類型別にみた場合、人対車両の事故が半数近くを占めていますが、その中で最も多い事故類型は次のうちどれでしょう？

- ①対面通行中（歩行者が相手方車両と対面して道路を通行中に発生）
②背面通行中（道路通行中の歩行者の後方から相手方車両が進行して発生）
③横断中

Q3

クルマのヘッドライトでロービームの照射範囲は約 40m ですが、ハイビームの照射範囲は次のうちどれでしょう？

- ①約 60m ②約 80m ③約 100m



漫画：塚本ケスケ

「解答」は 7 面下、「解説」は下記 SJ ホームページでご覧いただけます。
<http://www.honda.co.jp/safetyinfo/sj/>

Honda 秋のセーフティキャンペーン実施中！

声かけでワンポイントアドバイス

Honda では 9 月 18 日～ 10 月 31 日の期間、「2017 年 Honda 秋のセーフティキャンペーン」を実施しています。期間中は、Honda 及び Honda 関連企業の従業員、販売会社のスタッフが「無事故・無違反の継続活動の実施」を宣言し、自ら率先して交通安全を実践。二輪・四輪販売会社では、お客様に安全運転を意識していただくため、全席シートベルトの着用やバイクツーリングに向けたアドバイスや、冊子の配布や映像の放映など啓発ツールを多数用意しています。

また、Honda のホームページからは最新の安全技術情報、安全運転のためのアドバイスを紹介した冊子「Think Safety」や、家庭で交通安全について子どもと一緒に考えるきっかけとするための「交通安全ぬりえ」などがダウンロードできます。



四輪販売会社に配布している安全情報誌「Think Safety」。以下のホームページからダウンロードすることも可能。

http://www.honda.co.jp/safetyinfo/topics/safety_campaign/

●交通安全ぬりえ ダウンロード

ホンダ 2017 セーフティキャンペーン 検索

ダウンロードした「交通安全ぬりえ」に色をぬって、家族で決めた交通安全の約束を書いたら、下記宛にお送りください。応募者全員に ASIMO の交通安全ステッカーをプレゼント！

【応募締切】

2017 年 11 月 12 日（日）

【送付先】

本田技研工業株式会社 安全運転普及本部
交通安全ぬりえキャンペーン事務局 行
〒107-8556 東京都港区南青山 2-1-1

※送付いただいたぬりえは、交通安全ステッカーと一緒にご返送いたします。
※お申込みいただきましたお客様の個人情報は、発送業務以外の利用は致しません。

